

学会企画

「放射線看護の臨床研究をかたちにする」

How to realize a research on radiological nursing

太田 勝正¹ 野戸 結花²

Katsumasa OTA¹ Yuka NOTO²

1 名古屋大学大学院医学系研究科

2 弘前大学大学院保健学研究科

1 Nagoya University Graduate School of Medicine

2 Hirosaki University Graduate School of Health Sciences

日本放射線看護学会学術推進委員会は学会員の学術推進に資する活動を行っており、その一環として、平成28年度から学術集会において会員の皆様と意見交換を行うことを目的とした交流集会を開催してきた。今年度は学会企画として「放射線看護の臨床研究をかたちにする」と題し、放射線看護に携わる方々の臨床研究の推進に役立つ内容に関する情報提供と意見交換を行った。情報提供者は学術推進委員の太田勝正（名古屋大学大学院医学系研究科）と野戸結花（弘前大学大学院保健学研究科）である。

太田勝正からは「看護研究の基本」というテーマで、看護研究の流れおよび取組みにおけるポイントを解説した。看護が科学として、学問として社会から認められるためには、研究へのためめぬ努力が必要である。その一方で、研究参加者（被験者）の権利の保護や個人情報の取扱い等に不備があれば、社会から大きな批判を受けるとともに、研究自体の質も問われる。特に、臨床で活躍する看護職が取組む看護研究が、医学等の他領域からも社会からも評価されるものになることが重要である。そのための要件として、看護研究を科学的に行うための手順とその詳細、特に、研究の初期段階の準備としての「テーマ・概念の明確化」や「文献検討」、「研究用具の準備」、さらには「研究倫理審査」について、方法と考え方、姿勢の詳細が述べられた。

野戸結花からは「看護研究の進め方—日々の実践から研究の芽をはぐくむ」というテーマで、臨床における疑問から研究テーマの明確化までのプロセスを解説した。看護研究においては、日々の看護実践で感じる「疑問」を「系統的、学問的、科学的手法による探求で明らかにする」ことが求められる。「疑問」から解決方法を導く過程の中で、看護研究につながる視点を見出し、研究としてつむぎあげていく方法について、具体例を挙げて説明した。

参加者との意見交換では、看護研究としてまとめたいと考えたが「研究ではなく業務改善」との意見をもらいどう考えてよいか困惑しているという事例が紹介された。太田、野戸からは「疑問」の解決に取り組む段階でのゴールの設定が重要であり、施設内での業務改善を目指すのか、あるいは一般化を目指すのかによって、その後の進め方が異なること、そこに「業務改善」と「看護研究」の分かれ道があること、身近に看護研究の支援者を見つけることの重要性が述べられた。最後に太田から、医学研究が主体である研究倫理委員会に看護研

究を申請する場合の困難と対応策、考え方が述べられ、「今は試練の時」と感じることもあるが、看護全体が手を携えて努力し続けることを期待したい旨の内容が強調された。

今回の学会企画を通して、放射線看護に携わる看護職の皆様が研究疑問を大切にして看護研究につむぎあげていく、その一步を踏み出すきっかけとなることに期待したい。

(学術推進委員会：西沢義子、野戸結花、青木和恵、太田勝正、大森純子、作田裕美)